

Newsletter

第 21 号
2025 (令和 7) 年 2 月 28 日
ATEM 九州支部事務局 発行
Email: atem9.office@gmail.com
URL: <http://atem.org/kyushu/>
編集: 吉村 圭 (支部広報担当)

映像メディア英語教育学会 九州支部

Contents

p. 1

巻頭言: 支部長あいさつ

p. 2 - 3

支部大会報告

p. 4 - 7

映画コラム: 映像メディア
ショッキング

p. 8

会員著書 (新刊) 紹介



巻頭言

—石田 もとな (九州支部長)

ニュースレター21号がこのように完成しました。本号では第26回九州支部研究大会に関するご報告と、英語教育と向き合う支部メンバーの先生方による映画に関するコラムを掲載しています。ぜひ楽しんでご覧いただければと思います。

第26回九州支部研究大会は、9月7日(土)福岡大学において盛会のうちに無事終了しました。村田希巳子先生による、「映画『オープンハイマー』の製作意図」、秋好礼子先生による「小説の多様な語りをアダプトする—映画『カラー・パープル』(2024)の手法」、河野弘美先生(西日本支部)による「『Desperate Romantics』(2009)を通してラファエル前派の活動と女性の社会進出を読み取る」、呉春美先生(東日本支部)による「英文読解と映像の組み合わせによる『人権問題』への取り組み」、吉村圭先生による「Charlie and the Chocolate Factoryの改訂と映像化をめぐるOompa-Loompasのメタモルフォーゼ」の5件のご発表がありました。他の支部からもご発表を頂き、交流ができておりますことも大変うれしく思っております。

11月9日(土)京都女子大学で行われました第29回ATEM全国大会内の総会にて、東北大学のRyan SPRING先生が新ATEM会長として承認されましたことをご報告申し上げます。5年ぶりの対面での全国大会は、活気に溢れており、人と直に接することの良さを感じました。今後も様々な学びを通じた交流を大切にして参りたいと存じます。

第26回 支部大会報告



タイムスケジュール

- 13:30- 受付開始
- 14:00- 開会式・支部総会
- 14:30- 研究発表
 - 映画『オープンハイマー』の製作意図
 - 小説の多様な語りをアダプトする—映画『カラー・パープル』(2024)の手法
 - 『Desperate Romantics』(2009)を通してラファエル前派の活動と女性の社会進出を読み取る
 - 英文読解と映像の組み合わせによる「人権問題」への取り組み
 - Charlie and the Chocolate Factoryの改訂と映像化をめぐる Oompa-Loompas のメタモルフォーゼ
- 16:55- 閉会式
- 17:00- 親睦会
- 18:00- 懇親会

■日 時：2024年9月7日(土)

■会 場：福岡大学 中央図書館 1階多目的ホール

第26回九州支部大会は福岡大学中央図書館の多目的ホールにて開催されました。当日は35度の猛暑日にも関わらず、大勢の方にご参加をいただきました。当日は5件の研究発表が行われました。

研究発表



映画『オープンハイマー』の製作意図

—村田 希巳子 (北九州市立大学)

「原爆の父」と称されるオープンハイマーの伝記映画『オープンハイマー』に関する議論が行われました。第二次世界大戦末期の歴史的事実を踏まえながら、オープンハイマーに関する批判的な議論と、その伝記映画における問題点について考察が行われました。

小説の多様な語りをアダプトする—映画『カラー・パープル』(2024)の手法

—秋好 礼子 (福岡大学)

アリス・ウォーカーの小説『カラー・パープル』(1982)の最新のアダプテーション(2023)について、特にその語りの技法に焦点をあてた議論が行われました。アダプテーションでは女性たちの自立と団結が強調されていることが指摘されました。





『Desperate Romantics』（2009）を通して ラファエル前派の活動と女性の社会進出を読み取る

—河野 弘美（京都外国語短期大学・西日本支部）

西日本支部より、京都外国語短期大学の河野弘美先生にご発表いただきました。ラファエル前派の時代に「プロ」として確立していた女性美術モデルという職業に関する調査と、ドラマ『Desperate Romantics』（2009）からその描かれ方が検証されました。

英文読解と映像の組み合わせによる「人権問題」 への取り組み

—呉 春美（神奈川大学・東日本支部）

東日本支部より、神奈川大学の呉春美先生にご発表いただきました。講読授業での人権・差別に関する教育をテーマに、授業で人種差別問題を考える際の、映像メディアの効果的活用について提案がありました。



Charlie and the Chocolate Factory の改訂と映像化をめぐる Oompa-Loompas のメタモルフォーゼ

—吉村 圭（佐賀大学）

ロアルド・ダールの『チャーリーとチョコレート工場』について、小説の初版、改訂版、映画3作品を交え、差別表象の変化をたどる議論が行われました。

親睦会・懇親会

大会後には恒例となった「お土産コーナー」での親睦会と、会場を変えての懇親会が行われました。九州支部らしい、終始和やかなムードの大会となりました。



映像メディアショッキング Vol.16

—80年代洋画特集—

今回の「映像メディアショッキング」は「80年代洋画特集」です。80年代という大作、名作が多く生まれた時代の洋画について、英語教育・英語学習の観点や、作品に関する考察、作品への自身の思いなどを語っていただきます。



松尾 祐美子 (著者プロフィール)

宮崎公立大学非常勤講師。音楽畑から文学畑へと植え変わり、その挙げ句に、再び音楽(今回はJAZZ)へ回帰中である。JAZZの歌詞とその背景などいろいろと興味を惹かれるところが多いのが魅力のこのジャンルに、音楽と英語の両刀で切り込んでみたいと考えている。

※ ケビン・コスナー主演の *Field of Dreams*(1989)にも登場する野球選手。

The Natural (1984) —アダプテーションの見せ所？

—松尾 祐美子 (宮崎公立大学)

大谷翔平に始まり、大谷翔平で終わった感のある2024年。今でこそサッカーやバスケットボールなど多彩な球技が人々を魅了するが、大谷もよく比較されるベーブ・ルースが活躍した当時、野球は絶大な人気があった。その人気の裏では八百長事件も度々起こり、日本では1969年から1971年にかけて起きた黒い霧事件の一連が社会に衝撃を与えた。アメリカでは、実は半世紀も前(1919年)にブラック・ソックス事件が起き、8人の選手が野球界から永久追放された。そのうちの1人、ジョー・ジャクソン(シュレス・ジョー)※をモデルにマラマッドが執筆した処女長編が *The Natural* である。映画化にあたって、キャストには主人公ホブスをロバート・レッドフォード、幼なじみの恋人役にグレン・クローズ、因縁のファム・ファタールにキム・ベイシンガーとバーバラ・ハーシーが起用され、脇を固める俳優陣もロバート・デュバルを始めとする名脇役が揃っている。

光と闇(=善と悪)を対比させながら描かれる映像の美しさも見所。オープニングシーンに映し出されるキャッチボールの場面は、いわゆるマジックアワーに撮影された情景で、レッドフォードの金髪が神々しいまでに輝いて見える。光に包まれた主人公の本質が善でなくて、なんだらうといわんばかりの演出である。また、彼が人生に迷いスランプに陥るときに登場する幼なじみのアイリスもやはり善を表すかのように、明るい光に包まれている。アイリスという名が虹の意味であるということを考えれば、彼女は光の世界からの使いと考えて良いだろう。

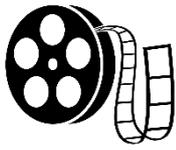
対照的に、最初にホブスを奈落の底へ突き落とすことになるハリエットは黒いレースを身にまとい、八百長を持ちかけるニューヨークナイツのオーナーは真っ暗な執務室に座っている。

実は本作品は原作の小説とは全く異なる結末となっている。原作ではホブスは結局八百長に加担し、最後に心変わりをしたものの、その過去を暴露されて自分の行いを後悔する人物として描かれている。ところが映画では、不運と逆境、試される道德心という環境でもがきながら、結局は守護天使のようなアイリスによって救済され、ヒーローとなる結末となる。バックスクリーンに飛んだ打球がナイター照明を破壊し、それが花火のように散っていく場面は、正義を貫いたホブスへの褒美であるかのようだ。原作通りであれば、道德心が欠如した自己中心的な性格のために悲劇的な結末を迎える主人公が、映画では、いわゆる成長物語のように試練を経て本来の愛と家庭を手に入れる筋立てに変わっているのだ。筆者は、同じくマラマッドの“*Idiot First*”で描かれた、主人公メンデルが乗る列車の扉に描かれた花を連想した。映画同様、人生の美しさ、希望を象徴するものである。

エンドロールに現れる“Based on the Novel by Bernard Malamud”を見ながら考えたのは、当時、絶大な人気のあったレッドフォードのイメージに合うように、そして観客の好みや期待

に沿うように製作者側が創造的解釈をしたのかもしれないということである。ここまで大きく原作を変えることもあるのだという、アダプテーションの手法の分かりやすいお手本かもしれない。

—松尾 祐美子（宮崎公立大学）



Working Girl（1988）に見る 80 年代アメリカ

——ニューヨークの風景

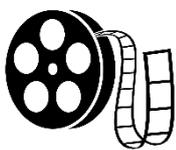
—松尾 祐美子（宮崎公立大学）

主人公テスは証券会社で働く女性。上昇志向も強く、証券マン養成コースに入りたいと思っているが学歴が低いために相手にされない。頭は切れるし M&A に関するアイデアも悪くはない。しかし自分の立場を理解してもらえないはずの女性上司キャサリンは、こっそりとテスのアイデアを横取りしようとしていた。そのことに気づいたテスがキャサリンの留守中に、彼女に成り代わって交渉を成立させようと奮闘するサクセスストーリーである。映画公開当時の日本はバブル期の真っ只中でもあり、合併交渉の場面では「日本がうんぬん・・・」という台詞があるほど、経済的な勢いもあった頃である。男女雇用機会均等法が 1986 年に施行されたばかりで女性が総合職につける事も夢ではなくなっていた。自身の気持ちや経験を主人公に重ねて見た人も多かったのではないかと思う。

まずは冒頭で、自由の女神像の空撮映像とバックに流れるカーリー・サイモンの歌声に圧倒される。ここで既に映画のあらましが想像できるといっても過言ではないだろう。しかし、この映画を何度も見る理由はこれだけではない。作品中に 9.11 前のニューヨークを見ることができるからである。この街が舞台の映画は数あるが、ニューヨーカーのマイク・ニコルズ[※] が撮ると映像が魅力的に思える。町を知り尽くした人の描くニューヨークである。作品には世界貿易センターが存在していた金融街を背景として、活き活きとダイナミックに時代を感じさせる空気感が溢れている。なにしろ、ロケの一部はツイン・タワーの一階ロビーを実際に使ったそうなので臨場感は抜群である。本物の持つ力が視聴者の心を掴むところだ。テスがため息をつきつつ見上げる先にそびえ立つツイン・タワーは自由の女神同様、成功のシンボルである。社会階級の違いが現れている場面にも注意を払いたい。化粧、髪型、衣服から下着、持ち物、住居などによく現れている。階級対立、女性蔑視をはねのけて恋も仕事も手に入れたアメリカン・ドリームのような凡庸な展開ではあるが、私たちがもう見ることのできない、あの風景、あの時代、在りし日のニューヨークを思い（あるいは知り）、失われた時にひととき、身を置いてもらいたいと切に思う。

—松尾 祐美子（宮崎公立大学）

※ マイク・ニコルズ（Mike Nichols）は『卒業』を撮った監督。ブロードウェイの舞台演出家。



映画『スタンド・バイ・ミー』（1986）で学ぶスラングの手ごわさと面白さ

—吉村 圭（佐賀大学）

もう 10 年以上も前になるが、「スクリーンプレイ」シリーズの『スタンド・バイ・ミー』（2014）[※] にコラムと語句解説で関わる機会があった。幼いころから親しんだ 80 年代の名作中の名作に、英語を活かして関わることで感激したものだ。しかし翻訳や語句解説を行う作業そのもの

吉村 圭（著者プロフィール）
佐賀大学教育学部准教授。専門はイギリス児童文学およびその

映像化作品。近年は、A.A.ミルの『クマのプーさん』やロアルド・ダールの『チャーリーとチョコレート工場』のアダプテーション研究に注力している。現在二児（5歳、2歳）の育児に日々奮闘中。

※ 八尋春海、監修、『スタンド・バイ・ミー』。株式会社フォーインスクリーンプレイ事業部、2014。
<https://www.screenplay.jp/isbn978-4-89407-504-7>

には大変な苦労があった。というのも、この作品の台詞を扱うということは、スラングとの闘いを意味するからだ。

映画『スタンド・バイ・ミー』は不良にあこがれる10代の少年たちを描いた作品である。そのため彼らの台詞には必然的に下品なスラング（卑語・俗語）が多用されることになる。そもそもスラング自体、乱暴でセクシャルなものが多く、そのままでは（特に参考書となると）日本語にできないため翻訳者泣かせなのだ。しかし中には、多様な文化的背景を理解していなければ意味さえ分からないような難解なものもあった。例えば以下の例を見ていただきたい。

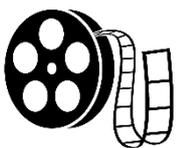
TEDDY: Yeah, Vern told us how you found him: "Oh, Billy, I wish we never boosted that car! Oh, Billy, I think I just turned my Fruit of the Looms into a fudge factory." (p.128)

この台詞は「死体」(the body)を見つけた主人公4人のもとへ、敵役のエースたちが遅れて現れて脅しをかけてきた場面のものである。仲間のひとりテディが、エースの一味のチャーリーが死体を見て「ビビっている」とからかっている台詞であるが、下線部は直訳すれば「俺はたった今『機織りの実り』をファッジ工場に変えてしまった」となる。もちろんこのような支離滅裂な日本語などあってはならない。

ここでまず重要なのは、“Fruit of the Looms”が有名な下着メーカーのことで、“fudge”がチョコレート菓子だという文化的背景を理解していることである。さらに、不良少年たちが常に下品なスラングの応酬をしていることを念頭に置いておく必要がある。つまり、チャーリーの“Fruit of the Looms”製のブリーフが「チョコレート工場」になるという台詞は、何らかの下品な光景を描写しているのだと…。詳細は省くが、それができてようやく初めて、テディがいかにしてチャーリーをからかっているのか、その確かな意味を理解することができるのだ。その結果解き明かされる意味には心底脱力させられるが、調査と推測でその意味にたどり着くまでの過程は、推理小説の謎を解き明かすようで、英語学習として非常に刺激的だといえる。

ちなみにこの箇所は、先述した「スクリーンプレイ」では「ちびりそうだぜ」(p.129)と訳してある。英語の参考書に載せるにはギリギリを攻めた訳だといえる。映画の字幕では、翻訳家の菊地浩司氏によってより原文が活かされた（露骨な）訳がつけられている。ここでは紹介しづらいのでぜひDVD等で作品をご覧になって確認していただきたい。

—吉村 圭（佐賀大学）



『愛と哀しみの果て』（*Out of Africa*, 1985）の中の焚火を囲んで語り合うシーン

—村田 希巳子（北九州市立大学）

村田 希巳子（著者プロフィール）

今は、北九州市立大学と常磐高校で教えています。集中力のない学生や生徒にどうやって聞かせるのか、毎日悪戦苦闘しています。趣味は、バードウォッチングと花の鑑賞です。鳥の名前、花

1980年代に私が一番印象に残った作品と言えば、『愛と哀しみの果て』（*Out of Africa*）だ。主人公のカレン・ブリクセン（メリル・ストリープ）とその恋人デニス・フィンチ・ハットン（ロバート・レッドフォード）は愛し合うようになるのだが、あまりに自由奔放なデニスを、カレンは繋ぎとめることができない。この映画は、仕事や結婚があと一歩でうまくいかと思えば、必ずどんでん返しに見舞われ、元の木阿弥に陥るというストーリーで、最後までかたずをのんで見入ったことを覚えている。

その中でも、私が一番印象に残ったのは、夜の集まりで主人公たちが焚火を囲み、それぞれが物語を語り合うシーンだ。このシーンでは、特にカレンの語り印象的だった。デニスが先に話

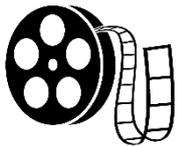
の名前を覚えるのに、これまた衰える記憶力との闘いです。

をし、その後、カレンに物語の続きを促す様子がとても心に残っている。この焚火の場面は、カレンの語りの才能や彼女が紡ぐ言葉の魅力が際立つ瞬間だ。

私は、この場面を、子どもに文学的な物語を語る「お話し会」と重ねて見ていた。子どもが小さい頃、図書館のお話し会によく連れて行ったことを思い出す。そのとき、まず語り手が部屋を暗くし、お話のろうそくに火をつけて物語を語り始める。そうして子どもたちを集中させ、物語の世界に誘うのである。この映画では、大人たちが、ろうそくではなく焚火のそばで互いの物語を語り合い、思いを分かち合う。語られる英語はとても簡潔で美しく、それがなおさら迫力を感じさせた。

この焚火のシーンでは、カレンの深い内面の世界と、即興で物語を作る創造力の豊かさが充分に発揮されている。また、アフリカの夜の情景がとても美しく描かれ、印象深い詩的な一場面となっている。この場面が、映画全体のテーマとも響き合い、観る者の心に強く刻まれるのだと思われる。

—村田 希巳子（北九州市立大学）



秋好 礼子（著者プロフィール）

福岡大学人文学部英語学科所属。専門は19世紀アメリカ文学で、当時の新聞や雑誌の記事を読むのも好き。趣味はスポーツ観戦と焼き鳥店巡り。

1980年代最後を飾る映画『メジャーリーグ』（1989）

—愛すべき弱小球団が教えてくれること

—秋好 礼子（福岡大学）

少々禍々しい話だが、アメリカのプロ野球リーグ（MLB）の歴史を見ると、いくつかのチームに「呪い」と言われる不調期間がある。私の推し、Boston Red Soxは、86年間ワールドシリーズで優勝できなかった。かのBabe Ruthが大金と引き換えにNew York Yankeesに放出されて以降のことなので、この不調は“The Curse of the Bambino（Babe Ruthのあだな）”と言われる。目をBostonから西に転じると、Cleveland Guardiansも1948年を最後にワールドシリーズで優勝できていない。こちらはNFL、NBAも不調の足並みが揃っているため、Cleveland Sports Curseと言われる。この呪われ中のGuardiansを題材にした映画が*Major League*(1989)である。映画の中で新オーナーが「ペナントでも35年勝っていない」と言うが、それは当時のGuardiansの状況そのものであり、映画は大ヒットした。

地域密着型のアメリカのプロスポーツは、州を地理的に学生にイメージさせやすい。例えば*Major League*はオフシーズンから始まるが、Guardiansのキャンプはアリゾナで行われる。日本のプロ野球チームが宮崎や沖縄でキャンプをするように、アリゾナはオハイオより南で、暖かい土地柄とすんなりイメージできる。新オーナーが新たに球場を建てようとするのはフロリダ、伝説のキャッチャーがオフを過ごすのはカリフォルニア、南と西で暖かい。大谷選手が西海岸のチームを選んだ理由の一つも、体調管理がしやすい温暖な気候にあったと聞く。

この映画はマイノリティ表象の議論にも使える。ここまであえてGuardiansというチーム名を使ってきたが、この映画の製作・公開時はIndiansだった。チームのロゴは先住民男性を漫画化した“Chief Wahoo”で、映画でピッチャーのリックキーが登板する時に“Wild Thing”を大合唱しながら熱狂的に応援するファンたちは、先住民を模したいでたちをしている。差別的ということで長年物議を醸していたこのチーム名とロゴは、2018年を最後に共に廃止された。マイノリティ表象の議論をする際、学生たちは安易に少数派を擁護しがちだが、この映画の中で選手とファンが一体となった様子を見た後では、容易に一方に傾くことはなく、議論が盛り上がる。

—秋好 礼子（福岡大学）

会員著書（新刊）



スーパーカー外伝

著者： 松中 完二（久留米工業大学）

[出版社] 三省堂書店/創英社 [出版年月日]2025/1/23

古今東西の逸話を縦横無尽に駆使しながら「スーパーカー」を通して見た日本人と日本の大学教育、日本社会に警鐘を鳴らした書。本書に通底するメッセージは「スーパーカー」を通して心を解き放ち、本当の自分を取り戻して漢(オトコ)になれ!、に尽きる。

松中 完二（著者プロフィール）

久留米工業大学准教授。専門は言語学(日英語の意味論)。著書に『現代英語語彙の多義構造—認知的視点から理論編』(白桃書房 2005年)、『現代英語語彙の多義構造 実証編』(白桃書房 2006年)、『ソシール言語学の意味論的再検討』(ひつじ書房 2018年)、『フェラーリとランボルギーニ』(三省堂書店/創英社 2022年)等がある。

入会案内

ATEM 九州支部では新規会員を随時募集しています。会員登録はホームページから受け付けています。ご不明な点は支部事務局（E-mail）までお気軽にお問い合わせください。



Website : <http://atem.org/kyushu/>

E-mail : atem9.office@gmail.com